

淨土

1992-2

第五十八卷

昭和二十四年四月二十八日
平成四年一月二十五日印刷

二月号

第一回 日先行
誌 第五号
平成四年一月一日発行



'92 "春"
小林



二月の秀句

涅槃図を掛けんとすなり僧五人

高浜 虚子

涅槃の図白きは象の歎けるなり

山口 誓子

涅槃図にまやぶにんとぞ読まれける

後藤 夜半



極楽はもはら弥陀の願力はなはだ
ふかし。

——『念仏大意』

目 次

＝連 載＝

生も死も悦べる世界③……………須 藤 隆 仙……(2)

—法 話—

涅槃 ①……………藤 原 円 忠……(9)

(ひ)(と)(く)(ち)(俳)(話) [10] 涅槃図 …………… (18)

季語やぶにらみ (20)

……………木 下 隆 一 ……(26)

去年今年

◇◇心のしらべ・生活のうた④◇◇

奥の細道出発の海辺橋と芭蕉像……………細 田 隆 善……(20)

表紙絵 小林治郎画

連
載

生も死も悦べる世界(三)

救済の力を信ずる

前回、仏教の悟りというものが、未完の人間を救う力として存在するもの、それは不可思議久遠の昔からである、ということの説明したのですが、鈴木大拙博士はこれを、「救済しようとする宇宙的な意志」を説明されたようであります。真まことにそのとおりであります。宇宙にはもともとそういった救済しようとする意志がある、それに気づかせてもらうのが信心というものでありましょう。

須す
藤どう
隆りゅう
仙せん

(函館市称名寺住職)



世の中には不幸なことも一ぱいあります。今なお世界のあちこちで見られる戦争の不幸、あるいは雲仙岳のような恐ろしい天災、そういった面だけ見ますと、宇宙に救済しようとする意志などあるのか。不幸に陥れる意志はあっても、救済しようとするような意志などないのではないか。そういうぶかる人もあることでしょう。

しかし、よくよく広く大きく考えてみますと、やはり救済の意志はあると思います。長崎や広島はあの大戦で原爆の被害にあり、悉く焼き尽くされてしまいました。学者は何十年も緑は帰ってこないと言われましたが、如何でしょうか。幾年も経たずに、草が生え、木が芽を出し、青々とした世界が開けたではありませんか。そこに私たちは、即ち「救済しようとする宇宙的な意志」といったようなものを認めないわけにはいかないのです。

愛する人たちに先立たれますと、人の命をさらっていく宇宙の力を憤らずにはおられない心境の場合もございます。しかし人の死ということも、よくよく観察すると、それこそ宇宙的な規模で見えますと、全体的には、それが殺す働きではなく、生かす働きの中の一環であることに気づくのであります。

そういった救済の宇宙的な意志、それを仏教では、浄土教では、仏の本願、阿弥陀如来様の本願と教えているわけであります。

この本願に気づいて、苦しい苦しい逆境を、力強く、感謝の心をもって、立派に生きて

いった人たちの例を、私たちは幾つも見聞きしているはずであります。氣をつけて見ていると、必ずそういう方はおられるものなのです。

その代表的なお方に、よく諸書に紹介される中村久子さん（故人）がおられます。両手両足がなく、見せ物に売られ、その上悪い男にだまされるなど、とても普通では考えられないような大変な大変な人生をおくられたお方です。それなのにこの方は、仏教の信仰、お念仏の信心で、この苦界を、五体満足な人よりはるかに立派に、力強く生きられたのであります。

中村久子さんは明治三十年、飛騨（岐阜県）高山の畳職人の家に長女として生まれしました。ところが、突発性脱疽という恐ろしい病気におそわれ、幼児のうちに両手両足を切断してしまふのであります。

それから久子さんの想像を絶する苦難の人生が始まるのであります。お父さんはそのために新興宗教に夢中になるのですが、心労があまりにもひどく、若死にしています。お母さんは久子さんと弟とを連れて再婚します。当時、女性は簡単に職に就けませんでしたが、生きていくとは結婚して夫に扶養してもらう以外に道はなかったのです。ところが、むこうにも先妻さんの子供二人がおり、久子さんはこの子供たちから犬や猫同然の扱いをうけるのです。お母さんも久子さんにだけかまっているわけにはいきませんから、久

子さんは、皿にもられて畳の上に置かれたご飯を、腹ばいになったまま食べるのでした。

ある時、お母さんは久子さんの前に義父の浴衣を置き、「これをほごして頂戴い」といつて家を出て行きます。家が貧しかったのでお母さんも安い賃金で働いていたのでした。

久子さんは驚いてしまいました。手も足もない自分に、この着物をほどけというのです。しかも十歳そこそこの子供です。夕方帰ってきたお母さんは、「まだほごしていいない」といつてきつく叱りました。それから久子さんは毎日涙をポロポロこぼしながら浴衣とにらめっこです。一週間もたった頃、久子さんはあることに考えつきました。自分には手も足もない。道具を使うことは出来ない。それでどうして着物をほごすかといったら、体中のなかから、ほごすことの出来る部分、使える部分を探し出さなければならぬ。それは何か？ いたいけな女の児が、それを懸命に考え、ついに考えたのが口があり歯があるということなのでした。

「そうだ自分には口と歯がある。これがあるから、今日までご飯を食べて生きてくることが出来たのだ。この有難い口と歯を使って今後は何でもしてみよう」久子さんはそう考えついて、とうとう苦心に苦心を重ね、ついにその浴衣をほごすことに成功するのです。

それからというものは、舌で糸を結び、あるいは針に糸を通し、歯でハサミを使い、立派に着物を縫い上げるまでになったのです。そう書いてしまえば簡単ですが、この間、私

たちではとても想像できない苦労があつたのは勿論でした、まず口で縫い物をするということは、ヨダレで布がぬれてしまふ、それを何とかぬれないように、つまりヨダレを外に出さないように工夫する。並大抵のことではありませんでした。

可愛い人形の着物を縫つたうれしさに、それを近所の子供にくれたところ、その子の母が、「口で縫つたものなど汚くてさわられない」といつて川へ投げてしまった、そういう悲しい経験もしなければならぬのでした。

口でお針が出来るといっても、それが家の経済を助けられるというほどのものではありませんでしたから、久子さんはついに二十歳のとき、興行師に身を売るのです。そして見世物として旅から旅の生活をつづけることになるのです。「見世物」何という悲しい言葉でありましょうか。私はこういう字を使いたくありませんが、仕方がありません。『広辞苑』は見世物として以下のように説明しております。「①珍しい物・曲芸・奇術などを見せる興行。②衆人の目にさらされ、面白がられること」

久子さんは毎日必死になつて衆人の前で、口で裁縫をしてみせ、口で字を書いてみせて、青春の日を刻んでいったのでした。手も足もない身は、用を足すにも、移動することも、みな人の手をかりなければなりません。それで見世物小屋では、下働きの男の人がその世話をしてくれたのですが、気のやさしい、いい人がおつて、久子さんはこの人と結ばれ、

女の子供さんをもうけます。この時の久子さんの感激は、その手記に天地を揺るがすほどの感動となって綴られておりますが、生まれてくる子供に手とあ足とがあるであろうかと心配する久子さん、そして生まれ出て、手も足も立派にありますと知らされたときの久子さん、もう涙なくしてこの事は書くことも語ることでもできません。

ところが、天はこの人にだけに無慈悲なのかと思うほど、後々も苦難がつづいていきます。折角結ばれた良き夫が兵隊にとられ、戦死してしまうのです。

久子さんは幼児を抱えて何とかせねばならず、また別な人と一緒になり、この男との間にも女の児が生まれますが、この夫もまた腸がんで亡くなるのです。二児を抱えた手も足もない女性が、横腹に穴があいて、食べ物そこからドンタ垂れ流す病夫を看護するさまは、とてもとても世界中探しても、こんな話しは滅多にあるものではありません。

二度目の夫も死に、久子さんは三度目の結婚をしますが、これが悪い男で、外に女がおりながら、久子さんの稼ぐ金を目当てに結婚したのでした。久子さんは毎日金をせびられ、これでは子供の教育もできないので別れることにしますが、この男は莫大な金を久子さんに要求してきたのです。久子さんは子供のために思ってその要求を呑み、幾年もかかってそれを払ったのです。

しかし世の中、鬼ばかりではありません。

＜日本図書館協会選定図書＞

『江戸物語』

細田隆善（豊明）著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

- 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録
- 定価一八〇〇円【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

〈発行・発売〉

ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一
電話（〇三）三二六九―一二九三 三二六七―六六三七
振替（東京）七―一一〇九三／千一六二

久子さんは、やがて真宗の坊さんで「無我愛」という宗教運動をやっておられた伊藤証信先生に見い出され、伊藤先生が後援会を作って下さり、見世物の世界と縁を断ちます。戦時中久子さんは、戦争で負傷し身障者となられたお気の毒な兵隊さんたちの慰問に巡られ、身障者の母として多くの人々から喜ばれ、感謝されたのでありました。

（つづく）

法
話

涅槃
(上)

「涅槃」という題で原稿を、というお話を頂いた時、先ず心に思ったものは、毎年二月十五日に、ご本堂の脇の部屋に掛けてお参りする、お釈迦様のおん涅槃



藤^{ふじ}原^{わら}円^{えん}忠^{ちゆう}
(市原市無量寺住職)

の掛軸であつた。掛軸は、お釈迦様がお亡くなりになつた時の有様を象徴的に表したものだ、沙羅の樹に囲まれた中央の台の上にお釈迦様が横たわり、周囲に

はお釈迦様の死を悲しむ菩薩や天人や人間や、色々の動物迄がそれぞれに悲しみの心を表して集まって来ている状況が描かれている。

お釈迦様は現在のネーバル領に近い北インドの国の王子として生まれたが、人生の矛盾を感じられて出家され修行の道に入られたと伝えられている。

お釈迦様は相当に若い頃から、深く真理を求めて、精神を統一し瞑想に入って静かに座られたりする事があった様で、出家修行をしたいお氣持が強かったのであろう。しかしそれが許される立場では無かったが、お釈迦様に二十九歳の時に、

お釈迦様一族の公的意志定機関である集会組織の中で、ある事件の解決のために「隣国と戦うべし」という決定が下されようとした時、「戦いは解決にはならない」としてお釈迦様は最後迄反対をして、多数の意見に従わない事態が生じ、集合組織としては、王子であるお釈迦様を集合組織から追放するとか処罰するという事も種々な影響があつて出来兼ねる事態を迎えた時に、お釈迦様自身が「追放のかわりに私が出家して此の地を離れる」と言われて出家された。

以来お釈迦様は、哲学を学び、禪定三昧の修行を学ばれたが驚くべき短期間

に、有名なお師匠様よりも高度な境地に到達して、次に難行苦行を最も長くそして激しく修行され、その結果、苦行は正しい結果の得られる修業では無い、と判断し瞑想に入って悟りの境地に入られて仏となられたという。

以来八十歳迄各地を廻って、専門に仏道修行する僧達や、家にあつて商業農業等に従事しながら仏の教えを求める人々に教えを説かれて、八十歳の時ご自身の寿命を残るは三ヵ月と判断されて、山の名を意味で表わすと、^{りようじんせん}「靈鷲山」山の名を発音で表わすと^{きやくせん}「耆闍崛山」という山を出発して^{きあんしやうじや}祇園精舎に向かわれたので

ある。諸々方々でお釈迦様の教えを求める者や、その地にずっと居て欲しいと引き止める者達が多く、仲々旅の進みが成らなかった。旅程半ばにしてクシナガラという所で、^{しゃら}沙羅の樹林の中に入り、身の回りの世話をする弟子に敷物を敷かせて横になられて、肉体の亡びる時間を待たれた、という。

その時、お釈迦様が横に成られた方向が頭は北（右を下に休まれたから顔は西^{すけめんざい}「頭北面西」）と伝えられている所から、死者を安置する時には頭を北にする習慣が今に伝わった。お釈迦様が、入寂の態勢に入られようとしている、と知った菩

薩が「これを食べれば心身ともに安楽である」という団子を、使いの者に託して急遽お釈迦様に届けたが、お釈迦様は「既に心身安らかである」と言われてお釈迦様はその団子を食べなかつたので、お釈迦様が息を引きとられた時、すぐにその団子をお釈迦様の枕もとにお供えした、と伝えられる所から人が亡くなると、すぐに枕団子まくらだんごを供える習慣も伝わったということである。さらにまた、一人の旅人が、お釈迦様が入寂されようとしている林のあたりから花を一本折って、その花を持って旅行を続けた所、伝道旅行に出ていたお釈迦様の高弟（長老）は、そ

の花が気になって旅人に声をかけ、お釈迦様の死を知った。そこで急ぎ帰って、火葬に間に合った、と伝えられる所から、人が亡くなると（連絡のつかない人にも知ってもらい度い、という心を込めて）、一本花「一本花」と称して花を一本立てる習慣も残っているわけである。

加えて、お釈迦様が休まれて入寂を待たれた位置に八本の沙羅の木があつて、その内半分の四本はお釈迦様の死と共に悲しみに枯れて、幹も葉も白く成つたと伝えられる所から、葬儀の祭壇の上の左右に紙で作った、半分枯れた沙羅の木に模した飾り（最近では金や銀一色で美

しくしてあるが）を置いて悲しみを表わす習慣もある。

私の寺の在る地方は、此の飾りを近所の人達で作ることになっていて、竹グシに色紙をはり、藁や大根に立てて作るが、この頃は、青い生き葉白い枯れ葉の二色の表現でなく、赤だったり黄色だったりの単なる飾りになっている。

これらのことが、お釈迦様の涅槃から思い起こされる。他にもお釈迦様入滅の時のあり様が、伝えられて日本の葬儀にとり入れられているものもある。お釈迦様はこの沙羅林の中でお亡くなりになる前に、集まった弟子等に最後の説法をさ

れて、「お前達は、私を頼ってはいけない。お前達は自分に頼りなさい。自分の心を光としていろいろな事をよく照らして生きて行きなさい。お前達は、何をもって自分の心が光り輝くものとする事が出来るか。それは私が教えた仏法によつて自分の心を磨きなさい」という最後の教えを遺されている。

お釈迦様は「私に頼るな」と言われたが、お釈迦様のお亡くなりになられた時の様子が種々と伝えられる程に、当時の弟子や信者等にとつてお釈迦様の入滅は衝撃的な事だったのであろう。

「涅槃^{ねはん}」、涅槃とは、お釈迦様が入滅された事だという。ただ、それを伝えるだけの事なのであろうか。ここで改めて考え直して見たいと思う。「ねはん」という言葉は日本語だが、この言葉は、古代の印度語（梵語^{ぼんご}と巴梨語^{ばりご}）で書かれたお経に「ニルバーナ」と書かれていた言葉を、直接に中国の文字の漢字に訳して「涅槃」としたもののや、古代の印度語（梵語、巴梨語）で書かれたニルバーナを、中央アジアなどのいろいろな地方の言葉に一度書き代えてから、たとえば、現在、シルクロードとして旅行者を多く迎える

れている、ウルムチやトルファン等の地方の言葉に訳され、その言葉に似せて中国の漢字に訳したものなどがあるらしい。訳した漢字も一様で無く、辞典からその例を引いて見ると、涅槃、泥汩、泥日、涅槃那、涅槃槃那、涅槃南、婆利涅槃南、等と訳されているが、それらの中で「涅槃」という漢文訳が代表的な訳として現在では一般に通用しているらしい。ではこの涅槃（ニルバーナ）という言葉の示す意味は何であらうか。これも辞典を参考に考えて見ると、「涅槃、とは貧欲^{とんよく}（むさぼり、欲しがり、執着すること）で心の中に迷いを生かし続ける心」

瞋恚（怒り、腹立ち、憎しみ、うらむ事）で心の働きを不安定にする心作用）愚痴（真理に対する無知、愚かさ等で一切の道理に通じる智慧に欠ける状態、誤った行ないを起こす原因）という貧瞋痴の三つの大毒が永く尽き果てて、煩惱（心身のわずらわしさ）が火で焼き尽くされたように成る事を涅槃（ニルバーナ）と名付く」とされている。また、「迷いの火を吹き消した状態」とも書かれている。

この様な状態をお釈迦様の弟子達は、お釈迦様の死を見出し出したから、お釈迦様の死を「涅槃」としたのだろうか、私は、そうでは無いと考える。

日本ではお釈迦様の亡くなられた日を「涅槃会」としておまつりするが、インドや南アジアではお釈迦様の亡くなった日を記念した行事は無く、お生れになった事、仏となられた事、亡くなられた事、総てをウーサーク祭の中に含めてお祭りする、という。その事は、お釈迦様の死を、涅槃（迷いを吹き消した）の記念の日と受け止めていないのではないか、と思える。

習慣というものは長い歴史の積重ねの中で、種々の影響を受け乍ら出来上がるものであるから、お釈迦様の亡くなった日を記念した行事が無い事だけで判断す

るのは早計であるが、仏教が始まった頃の在り方は、専門に修行する僧達にとつては、生きながらにしてニルバーナ（涅槃）の状態に到達する事を目標として修行に励んだはずである、家に在つて、商業、農業、工業等々を営みながら仏の教えを聞く信者達は、誰でも能力に応じて、神聖な人やその集団に、布施（寄附、援助、プレゼント）を行ない、道徳的に善な生き方をすれば、「死後は天に生まれる」という教えに従つて積極的（いまし）に布施を行ない、戒め（いまし）を持つて道徳的に生きる事に努力をして人生を送ろう、としたものと思われる。

この原点に立つて考えれば、涅槃とは、「生きている時に煩惱（心身のわずらわしさ）の火を吹き消して、涅槃の心に永住して周囲を導こうとする為の大きなハードルである、と考える事が出来よう。そうであれば、涅槃会の掛軸から制約を受ける感じで「涅槃・ニルバーナ」を考える必要は無いわけである。

次回は涅槃会の掛軸と別の角度から「涅槃」という言葉を考えて見たい。

（つづく）

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十八巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰會

涅槃図

勝崎裕彦

釈尊が涅槃に入られる時の姿を刻んだお像が涅槃像であり、寝釈迦ともいわれる。インド・スリランカ・ビルマなどでは、釈尊が右脇を下にして横臥する寝釈迦像がよく知られ、なかでもビルマ・ベグーの涅槃像は、長さ約五十五メートル・高さ約十四メートルの最大の大寝像で、十世紀頃の造立であると伝えられている。

私たちがよく接し、お参りするのは絵図が多く、涅槃絵、涅槃図と呼ばれ、二月十五日の涅槃会には欠かせぬ掛け物である。大聖釈

尊は八十年の生涯を閉じ、沙羅双樹の間に北枕して、右脇を下に横たわり、静かに涅槃に入られた。仏弟子をはじめ、王侯、貴族、諸天、鬼神、禽獣、虫魚などの五十二類、つまり生きとし生ける五十二衆が集まり、悲嘆号泣する別れの場面を描き出している。

坐る余地まだ涅槃図の中にあり（静塔）

涅槃図を拝していると、その悲しみ嘆くやるせない声を実際に聞こえてくるようである。私もまた共に悲しみ、共く嘆く人となり、敬慕の思いをこめてあらためて合掌礼拝する。その祈りの中から、「怠ることなく務め励んで、あなた方の修行を完成しなさい」とさとされた釈尊の最後のお言葉が聞こえる。

涅槃図に最後の教え確かめる（裕彦）

◇ ◇ ◇ 新購読会員のご紹介を ◇ ◇ ◇

月刊紙『浄土』の刊行、なんとか続けているという現状です。編集にもにも遺漏が多く、また校正のミスも相変わらずです。出版印刷をお願いしている方々にも、きびしい業界の昨今のありようの中で、ともかく懸命のご配慮をいただいております。わずかの人数での雑誌出版、発送をめぐるさまざまな営み、ともかく『浄土』の灯を消すことなく、法然上人鑽仰会の六十年にならんとする歩みを止めることはありません。失敗や不手際の多いことながら一歩一歩の歩みを今後も少しずつ進まなければなりません。

会員読者諸兄にご迷惑をおかけすることも決して少ないことではなく、この上なにかをお願いもできにくいことはありませんが、どうぞ今後とも暖かいご助成、ご支援を切にお願い申し上げる次第です。なにを隠しましょう。一ページ、ポツカリあいた埋草として、心よりの謝意にあわせて、臆面もないお願いを記させていただきます。

法然上人鑽仰会

心のしらべ・生活のうた(四)

奥の細道出発の海辺橋と芭蕉像

細田隆善(俳号豊明)

今から三百二年前、元禄二年(一六八九)三月上旬、芭蕉は深川芭蕉庵を人にゆずり弟子の杉風の別邸、採茶庵(江東区平野二丁目海辺橋付近)にとどまり、

三月二十日、採茶庵前の仙台堀川に船を浮かべ隅田川を上って千住(足立区)に上り、奥の細道の旅をつづけた。

海辺橋は都道橋で、昭和四年にできた



——海辺橋及び橋台地採茶庵の縁に
腰掛けた芭蕉像——

鉄橋であるが半世紀も経ってきたので、大修理が行われた。本年春、修理完成したので、海辺橋の橋台地に採茶庵の一部、縁側を再現しここに等身大の旅姿の芭蕉像が置かれた。像は銅製の像で緑青で着色された芭蕉像で、これから永年の望みであつた奥の細道に出発しようとする思いをこめた像である。芭蕉像については、全国に数多く、百体ほど見てきたが、木像あり、石像あり、陶像あり、近世になつてブロンズ像ありであるが、その姿は座像か立像の二種類でつた。しかしこの海辺橋の像だけは、縁に腰掛けた像で全国において唯一の像である。この芭蕉像と並んで写真をとっている人をよく見かける。

今春選挙によつて江東区長になられた室橋先生の発案によつて、海辺橋の手すりから一メートルのところの高さ二メートルの奥の細道の芭蕉の句五十句が飾られた。十月二十四日に完成し、芭蕉奥の細道出发点を飾る名所観光として知られるようになるであらう。奥の細道の芭蕉の句五十句は芭蕉の秀句として親しまれているものである。次に掲げる。

草の戸も住替る代ぞひなの家（深川）
すみかは
行春や鳥啼魚の目は泪（千住）
ゆくはる なきうを なみだ

あらたうと青葉若葉の日の光（日光）
あらたう こも
暫時は滝に籠るや夏の初（裏見の滝）
しばらく しほらく なげ
夏山に足駄を拝む首途哉（黒羽）
なつやま あしだ かどでかな
啄木も庵はやぶらず夏木立（黒羽雲巖寺）
きつづき



——海辺橋（江東区平野二丁目）にできた
奥の細道・芭蕉の句（50句）——

野を横に馬牽むけよほと、ぎす（那須殺生石）

田一枚植て立去る柳かな（那須芦野遊行柳）

柳）

風流の初やおくの田植うた（白川の関）

世の人の見付ぬ花や軒の栗（奥州日和田宿駅）

宿駅）

早苗とる手もとや昔しのお摺（信夫もち摺）

摺）

笈も太刀も五月にかざれ昏幟（医王寺）

笠嶋はいづこさ月のぬかり道（笠嶋）

桜より松は二木を三月越シ（武隈の松）

あやめ草足に結ん草鞋の緒（仙台）

夏草や兵どもが夢の跡（平泉）

五月雨の降のこしてや光堂（平泉）

蚤蝨馬の尿する枕もと（尿前の関）

涼しさを我宿^{わがやど}にしてねまる也（尾花沢）
這出^{はいで}よかひやが下のひきの声（同）
まゆはきを^{おもかけ} 俤^{おもかけ}にして紅粉^{べに}の花（同）
閑^{しづか}さや岩^{いわ}にしみ入蟬^{いる}の声（立石寺）
五月雨^{きみだれ}をあつめて早し最上川（最上川）
有難^{ありがた}や雪をかほらす南谷^{みなたに}（羽黒山）
涼しさを^{はぐろやま} かの三か月の羽黒山（同）
雪の峰^{みね}幾つ崩して月の山（月山）
語^{こと}られぬ湯殿^{ゆどの}にぬらす袂^{たもと}かな（湯殿山）
あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ（酒田）
暑き日を海にいれたり最上川（同）
象湯^{きまがた}や雨に西施^{せいし}がねぶの花（象湯）
汐越^{しほこし}や鶴はぎぬれて海涼し（同）
文月^{ふんつき}や六月も常の夜には似^{あまのがは}ず（直江津）
荒海や佐渡によこたふ天河^{あまのがは}（出雲崎）
一家^{ひとついへ}に遊女もねたり萩と月（市振）

わせの香や分入^{わけい}右は有磯海^{ありそうみ}（黒部川）
塚も動^{わがごと}け我泣^{わがなみ}声は秋の風（金沢）
秋涼^{てこと}し手毎^{てごと}にむけや瓜茄子^{うりなすび}（同）
あか／＼と日は難面^{つれなく}もあきの風（同）
しほらしき名や小松吹萩す、き（小松）
むざんやな甲^{かぶと}の下のきりぎりす（同）
石山の石より白し秋の風（那谷寺）
山中や菊はたおらぬ湯の匂^{におひ}（山中温泉）
今日よりや書付^{かきつけ}消さん笠の露（同）
庭掃^{はいて}て出^{いで}ばや寺に散柳^{さんりゅう}（同）
物書^{ものかき}て扇引^{ひき}さく余波哉^{なごりかな}（松岡）
月清し遊行のもてる砂の上（敦賀）
名月や北国^{ひよりのくに}日和定^{よみさだめ}なき（同）
寂しさを須磨^{すま}にかちたる浜の秋（種の浜）
浪の間や小貝にまじる萩^{あき}の塵^{ちり}（同）
蛤^{はまぐり}のふたみにわかれ行秋^{ゆく}ぞ（大垣）

◎『浄土』表紙版画絵販売についての二案内

『浄土』二月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒103 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

季語やぶにらみ(三)

去年今年

一九三二年（昭和七年）生まれの私は、今年の三月三日で満六〇歳、還暦を迎える。若い頃は六〇まで生き永らえるとは思ってもしなかった。で、還暦の自分の姿など想像もしなかったが、昨今は街の中で偶然鏡に映った

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

（随筆家）

己の姿を見て、あまりの変わり様に他人と錯覚したりする始末で、目の衰えと相俟って、鏡で自分の顔を見るのが疎ましくなり、髭を剃るのも電気剃刃に替えてしまった。これなら老醜をさらけだした顔と対面することな

く、新聞を読みながらでも用が足せるからである。

小児結核で一〇歳まで生きられるかどうかといわれた幼年時代。真剣に死ぬことを考えた戦争末期、そして敗戦後豹変した大人に不信感を抱いて過ごした少年時代。さしたる口マンスもなく過ぎた青年時代。がむしゃらに働いて何度死後の家族を慮って悩んだサラリーマン時代と、事に当たると、これは山だ、これは谷だと思いつつやり過ごしてきたが、いま振り返ってみると、わが人生は平板で、よくもまああのんべんだらりと生きてきたものよ、という思いが深い。「しかし、世間に害毒を流すことなく生きてきたんだから、それで良しとするか」

去年の暮、年賀状に添える句を考えあぐね

ていた時、女房にそう言うのと、

「まあ、神様の思し召しか、何かの巡り合わせでしょうよ。来年は貴方も還暦なんですからね、年賀状にはそんな事を書いたらいいんじゃないかしら」

と、いつになくいやに行き届いた答えが返ってきた。へ何が神様の思し召しだ、何が巡り合わせだ、と内心では女房に反発しながらも、その実妙に迫力のない自分を感じていた。還暦という漠然と意識してきたことをずばり言われてしまったからである。

「還暦は俺だけじゃないぞ」

「ええ、分かっています。でも私は貴方より半年も先のことですから、まだ実感が湧きませんの」

言うことが一々気に障るが、孔子風にいえ

ば来年は耳順の年だ、言っていることに間違いはないのだから、「六〇にして耳順う」の教えに従って反論は避けた。

還暦、十干十二支の組み合わせが六〇年で一廻りするので本卦還りともいわれ、昔は赤い頭布やちゃんちゃんこを贈って祝ったそうだが、いまはそんなことをする人はまずいないだろう。私が生まれた頃の平均寿命は男四二・一歳、女四三・二歳だったというから、そんな時代ならともかく、いまの六〇歳は役ばりばりで、せいぜいゴルフの腕が落ちたことや酒量の減退を嘆くのが関の山で、隠居している人なんぞいやしない。

考えてみれば「干支（えと）」のうち支のほうは、生年を聞かれて「七年の申（さる）」です」などと答えて重宝しているが、干のほ

うにはとんと無頓着で、私自身暮に酒屋が配ってきたカレンダーを見るまで、還暦と申歳は頭にあつても、干は全く意識になかったのである。へふーん、来年は壬申、みづのえさるか。とすると、俺の生まれた年も壬申という訳だ。いやあ、こいつは迂闊だったなあ、還暦という一応節目の年が壬申だったとは

お恥ずかしい話だが、これが真相なのである。自己弁護めくが、それだけ干支という考え方が我々の生活から乖離してしまつて、いまでは易学の世界でのみ、僅かに命脈を保っているということであらうか。だが、視点を変えれば、あらゆる情報が錯綜し、それに振り廻わされている現代よりも、陰陽説や五行説で律せられていた昔のほうが、それがいかに非科学的で矛盾に満ちたものであつたにし

ても、それを知らずに過ごしていたのだから、生きてゆくには楽であっただろうという気がする。占いが静かなブームをよんでいるのは、もしかしたら原点に戻りたい、本卦還りをしたいという気持ちだが、現代人のどこかに潜んでいるのかもしれない。

図らずも女房の言に触発されて、賀状に添える俳句の核になる言葉は、還暦・本卦還り・耳順・壬申と増えたが、さて、これをどう正月の季語に結びつけたものかと、年賀状の締め切り日にまだ間があつて気分が乗らなかつたせいもあるが、悩みが一つ増えたに過ぎず、句作りを始めるには至らなかつた。その原因はもう一つあつた。壬申という干支にこだわり過ぎてしまったのである。

壬申という文字を初めて目にしたのは、昭

和一九年、中学一年の国史の時間であつた。いわゆる「壬申の乱」である。六七二年（皇紀一三三二年）、時の近江朝廷に叛旗を翻した大海人皇子の吉野軍を、教師がどう説明したかは覚えていないが、少なくとも後に天武天皇となった人の率いる軍勢を、賊呼ばわりはしなかつたはずである。「壬申の乱」については稿を改めて述べるつもりであるが、日本史に初めて現われた骨肉の争いといつてもいいだろう。結果的には甥の弘文天皇（大友皇子）が叔父に敗れたのであるが、在位八カ月二四歳で自殺したこの悲劇の天皇が、第三九代弘文天皇として存在を認められたのは、歿後千二百年近く経つた明治三年のことであつた。この人がいかなる性格の人であつたかは詳かでないが、現存するわが国最古の漢

詩集「懷風藻」に収められている彼の作品は、文辞典麗氣宇洪大というから、若年にして文才に富んだ人であったのは想像に難くない。

何はともあれ、この壬申の乱後、大海人皇子は飛鳥浄御原宮で即位して、第四〇代天武天皇となったわけであるが、在位一三年の間に近江律令の改修、国史編纂に着手、更に、従来豪族達が私的に名乗り世襲してきた数十種の姓（かばね）を八色姓（やくさのかばね）——真人（まひと）朝臣（あそん）宿弥（すくね）忌寸（いみき）導師（みちのし）臣（おみ）連（むらじ）稀置（いなぎ）に再編制定して与奪の権を朝廷が握るなど、六七二年の壬申は、骨肉相争った悲劇の事実はさておき、着々と中央集権的律令国家を目指して発進した画期的な年であったのである。

井上靖の小説「額田王」を読み返して、壬申の乱に至る経過を辿ったりしていたものだから、句作りは一向に捗らなかった。それに正月の句を暮の内に作るのは氣ぶっせい作業なのである。というのは、元日の天候を予測するのが難しいからで、夜明けを表す初明りの句は作れても、初茜や初日の句は事前には作れない。もし元日が大雨だったりしたら、大恥をかきかねないからである。勢い毎年淑氣・初景色・初鴉・去年今年といったごく限られた季語を選ぶことになるが、これにも天候の要素を色濃く加味するのは避けなければならない。正月の句に傑作が少ないのは、案外こんなことが影響しているのかもしれない。

正月の句で有名なのは高浜虚子の「去年今

年貫く棒の如きもの」であろうか。若い時から私はこの句の持つ意味が分からなかった。

俳人飯田龍太は「昭和二五年の暮、翌新春放送用に作った作品の一つである。放送を念頭にしての作故か、耳に鋭く響く語調の強さがある。」と同時に、大自然の流転に較べると、

世相の変転も所詮は烟霞のごとし、と観じた花鳥諷詠の徒として信念が垣間見える」と鑑賞文で述べているが、私にはこの鑑賞文もよく分からない。確かに「去年今年」という季語を確立した功績は認めるが、何を以って棒に譬えたのか、修業が足りないせいなのか、いまだに解明できずにいるのである。むしろ、この句より、虚子の娘の星野立子が詠んだ「年寄れど娘は娘父の春」のほうが、「棒の如きもの」と気負った虚子像よりも、好々爺然と

した虚子のがほの見えて、私は好きである。

さて、折角女房がヒントを呉れたにも拘わらず、還暦も壬申も殆んど空振りに終わってしまった。私は先にも書いたように、幾つかの季語を決めて一〇〇句ほど作り、その中から差し上げる方のキャラクターに合わせて句を選ぶ。葉書にもっともらしい句を刷り込んでお茶を濁すという安易な手もあるが、年に一度のご挨拶としてはあまりにも失礼なので、俳句と姓名だけは手書きにしている。本当は下手な字はあまりお目にかけたくないものであるが……。

今年の賀状に書かせて頂いた句を列挙すると、次のようなものがある。

壬申に年改まる瞬時かな

今年来ぬクオーツ時計零時指し

壬申の歳旦までは乾杯す

息災に友よ還暦迎えしや

静謐の耳順の年の改まり

酒壺でんと卓に据ゑ年改まる

去年今年古句を忘れて駄々羅酒

初明り沖より明くる相模灘

林間に住まへば淑気さらに濃し

破魔弓の弦音鳴らし家に入る

ルージュ濃し破魔矢授くる巫女の口

買初に付き合うて買ふ物もなし

初売や海鼠潜ます桶の底

若水の味云々し水割りに

千歳経ていま湧ける若井かな

まづまづの日和を得たり初雀

犬連れし人が点景初景色

それぞれに新た車窓の初景色

水仙の岬芳し初景色

初景色先の帝がめでし島

最後の句の島は、下田の御用邸の辺りから

見た利島。初雀の句は賭けであつた。幸い晴

れてくれて助かつたが、酒壺、駄々羅酒、水

割りの三句は絶望であり、現実

は年酒とめられて耳順とつぶやける

逆らはず耳順の年の明けてより

なのである。これらの句が届いた方は、私

の気持ちを感じて、多分にやりとりされたこ

とと思う。

乱世の卦に壬申の年明けぬ

は一番気に入った句だったが、元日の句に

ふさわしくないで、賀状に添えるのは差し

控えた。

(終り)

◎ 読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ）
（風におまとも下さい。）

一、枚数 四百字詰用紙六十枚程度

一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十八巻 二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成四年一月二十五日 印刷

平成四年二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 (有)小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三三六二)五九四四

〒〇三(振替)東京八二一八七

◆◆◆好評の新刊◆◆◆

教訓仏教語辞典

栗田順一編 価格一六〇〇円

○仏の教えはいつも新しい！

日常用語として使っている仏教語も、その意味をよく理解してみると、私たちの暮らしに密着した教えが多い。本書はなじみ深い仏教語の意味を生活に密着したかたちでわかりやすく説いている。

（出版・発行）

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三十七 電話（〇三）三三三三—三七四一

*浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話（〇三）三四三六—三三五一まで。

第五十八卷

一月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
平成四年一月十五日印刷 平成四年二月一日発行